

「過去の震災を教訓とし今後の災害から命と暮らしを守る」

国崎信江(くにざき のぶえ)  
危機管理教育研究所 代表  
／危機管理アドバイザー



「過去の震災を教訓とし、  
今後の災害から命と暮らしを守る」

危機管理教育研究所  
危機管理アドバイザー 国崎 信江  
<http://www.kunizakinobue.com/>

危機管理教育研究所 代表 国崎 信江 <http://www.kunizakinobue.com/>

1

私はこれまで、被災地において様々な支援を行ってきました。特に熊本地震の際には、一般のボランティアではなく、災害対策本部を含めた職員の方の支援活動を行いました。熊本県益城町で、職員が様々なチームに分かれて活動するなかで、私は主に避難所対策チームと一緒に行動していました。4月19日に益城町に入り、活動をスタート。4月24日には益城町の西村町長から、同町の防災アドバイザーの職務を拝命し、その日から益城町という腕章をつけて、職員の方々と一緒に災害対応にあたったのです。

益城町の避難所には、たくさんの職員の方々が派遣されてきました。職員の方々は、次々と手が足りない避難所へと行くのですが、防災担当の職員の方は災害対策本部にいるため、防災のことも避難所運営のことも知らない一般の職員の方が、突然、避難所に行くこととなります。何をしていたかわからず、一方で住民の皆さんは、行政の職員ということで期待します。結果として、避難所運営がうまくいかないケースもありました。そこで私は、

第1回目の避難所運営会議を企画し、町長に避難所にいる職員の方々を集めてもらいました。その場で、内閣府の『避難所運営ガイドライン』を示しながら、今後の避難所で起こり得ることや、その時に職員の方々がどのような意識を持って行動すべきかといったことについて、話しました。そして今後、この避難所運営会議を定期的実施していくことを確認しあい、第1回目の会議を終えました。

私の個人的な感想ですが、熊本地震においては、とにかく避難所に多くの被災者の方々が集まりました。住宅の被害に遭われた方、あるいは一部損壊でも、心理的に建物の中にいることが怖いということで避難所に来られた方も多くいました。2回目の地震でさらに住宅への被害が大きくなり、特に非構造部材の被害により多くの指定避難所の建物が使えなくなったことで、使える避難所は過密状態になってしまいました。非構造部材の被害とは、例えば体育館の天井材が落下したり、ガラスが割れて破片で中に入れなくなったりするような状況を指します。

日本には、法令で定められた耐震基準があり、1981年の6月には、いわゆる新耐震基準が定められました。それ以降に建てられた建物は、新耐震基準に則った耐震性があるということで、公的な施設においても着々と耐震化率を高めてきました。ところが研究者の間では、例え耐震性能は満たしていても、非構造部材の被害を見過ごしていたら大変なことになると指摘されていました。実際、東日本大震災でも、中学校の体育館で天井材のパネルが落ち、そのパネルを支えているワイヤーが床に突き刺さり、ガラスというガラスが割れ、バスケットゴールが落ち、スピーカーも落ちるといった、耐震性能はあっても、避難所としてはとても機能しないケースもありました。

益城町でも、指定避難所の一つだった施設で、非常に大きな被害が見られました。東京で言えばビッグサイトや幕張メッセのような展示会が開催されるような建物で、エントランスのガラスも被害が大きかったのですが、中に入ると、階段のガラスの手すりが割れ、さらにホールの中は、ガラス張りの天井が割れて床に飛散しているという状況でした。地震の発生時刻が、1回目が夜9時、2回目が深夜1時だったので、幸い人の被害はありませんでした。よく「地震が来たら、より安全な所に移動しましょう」と言いますが、内壁が落ちたり、窓ガラスが割れたり、これだけ非構造部材の被害が至る所であるようでは、安全な場所を瞬時に見つけることは困難です。非構造部材の耐震化も考えていかなければならないと、改めて考えさせられました。

益城町では他にも、総合体育館のメインアリーナ、サブアリーナ、武道場で天井材が落ち、使えなくなってしまったので、廊下や他の避難所など、使える場所に住民の方々を誘導しました。すると、どこも過密状態になってしまい、当初は段ボールを敷き詰めた足の踏み場もないようななかで、多くの方が寝泊まりをしていたのです。そのうち少しずつ避難所の新設も進み、総合体育館のメインアリーナとサブアリーナも、天井材を全部撤去して、落ちるものがない状態にして安全を確保し、改めてそこも開放するなどしたことで、少しずつ過密状態も解消されていきました。

そのように落ち着き始めたタイミングで、衛生面と環境改善のために導入されたのが、段ボールベッドです。皆さん土足で、仮設トイレに行った靴のまま歩き回っているなかで寝るとなると、ホコリの発生も含めて、衛生面から体調を崩す人が出かねません。そこ

で段ボールベッドが早い段階から導入されました。この頃になると帰れる人には家に帰り、避難所で過ごさざるを得ない方々の顔ぶれが固まってきた時点でもあり、環境改善に本格的に取り組むことになったのです。土足厳禁にして掃除と消毒を施し、レイアウトづくりも始まりました。

この時点から、ペット対策も本格化しました。それまではペットと一緒に避難し、そのまま室内に入れていた方々もいたのですが、当初は、特に意見も出ていませんでした。お互い様という気持ちが強かったのでしょうか。しかし、この環境改善を機に、「ペットがこのままでいいのか」、「外に出したほうがいいのでは」という意見が出てきたのです。元々、気を使って、軒下に段ボールで簡易の犬小屋を作り、飼っていた方もいました。雨が続き、寒い日もありましたが、ペットのために軒下で過ごしていた方もいたので、室内の人にも同じような配慮を求め、「ペットはすべて外に出したほうがいいのか」ということになったのです。避難所の外にケージを設け、そこで飼ってもらうことにしました。

## 避難所におけるペットの対応



避難所によって多様な対応がとられた

- ①飼い主と一緒に避難所での同居
- ②外のゲージで飼い主と別居



↑避難所入口につながれた犬

ところが飼い主にとっては、家でも室内で飼っていたペットを、地震で人間もペットも不安な状況下で、いきなり飼い主と離してケージの中で過ごさせることに抵抗があるとの意見もありました。最終的には自己判断で、車中泊を選ぶ方や、被害を受けた家に戻り、いわゆる軒下避難と呼ばれる、敷地内にテントを張ってペットと共に暮らす方もいました。

やはり飼い主にとっては、ペットは家族同然なのです。私は、このペットの問題は、様々な被災地で起きている小さな子どもに関する問題と、ほぼ同じだと感じています。愚図ったり、泣いたり、あるいはオムツの臭いがするなど、小さなお子さんがいらっしゃる家庭が気兼ねすることは多いです。同じようにペットも、匂いや鳴き声などで、周りの方を気にしてしまいます。小さな子供は、慣れない避難所で暮らすことへのストレスを感じますが、ペットもまた慣れないケージで、ストレスを感じます。発災直後は避難所で小さい子供の遊び場がないように、避難所でペットを飼っている方も、散歩させる場所がなくて、駐車場をくるくると歩き回っていることもありました。ガラス片が落ちている心配のないこの駐車場なら、肉球を傷つけることがないので、くるくると歩かせて、ペットのスト

レスを解消していると言っていました。



また、飼い主の方々は、動物病院が被災してしまい、病気になっても受診できないことへの不安もお持ちでした。これも、小さな子どもがいる家庭と同じです。一般の病院はあり、内科の先生は避難所にも来てくれるけれど、小児科医の先生にはなかなか来てもらえません。被災した場合、子どもを診てもらえるかという不安を抱えています。

ペット用品も、思うように手に入りません。ホームセンターやスーパーも休業しているからです。赤ちゃんも同じです。ペットも赤ちゃんも、普段食べ慣れているものや、使い慣れているものがあります。赤ちゃんには、「こんな大規模な災害が起きたのだから、我慢して」と言っても通じません。粉ミルクの味が変われば吐き出し、哺乳瓶の乳首の形や素材が違うだけで、嫌がって口にしません。ペットも、普段、缶詰や美味しいソフトタイプのペットフードを食べていたら、いきなりドライ系のペットフードになったら食べないかもしれません。被災地でそろえようとしても、手に入らないことも多いでしょう。

また、人に関することならば、例えば法律関係の相談なら法テラスや行政の職員、それぞれの専門機関があり、相談窓口の案内がありますが、ペットとなると、誰に相談していいかわからないという問題もありました。少し経って獣医師会、動物愛護団体、NGOなどが支援してくれましたが、その支援体制が整うまでは被災地外まで赴き、営業している動物病院を探し回ったという人もいました。それからもう一つの課題はペットの預け先です。これは子どもとは違って、ペット特有の問題です。小さな子どもは、再開さえすればまた保育園に預けることができます。ところが、自宅が被害に遭ってペットは預ける先がないので、仕事に行けなくて困るという方もいました。仕方がないので車中泊にして、車の中にペットを置いて、知り合いの方にたまに様子を見に行ってもらって、何とか仕事に行けたという方や親族や知人に一時的にペットを預ける方もいました。

ところで、ペットのいる、いないに関わらず、熊本地震では車中泊者が多く発生し、これが自治体における今後の災害対応の課題となっています。私は、車中泊者を解消させるのは難しいと思っています。最初は、自宅を失い、避難所も受け入れ困難なために、我慢して自家用車を寝泊まりの場所として選ぶ人が少なくありませんでした。もちろんペット、小さなお子さん、認知症の親などが迷惑になるという理由で、車中泊を選ぶ方も多くいら

っしかったです。しかししばらくして、避難所の過密状態も解消されて入ることができる  
とアナウンスをしても、「いや、いいです」と自ら車中泊を選ぶ方も少なくありませんで  
した。その方の理由として、例えば、避難所でルールを決めて、トイレ掃除や支援物資の仕  
分けなどの自主運営をしている場合、そのお手伝いをしなければなりません。そのルール  
に従う生活を嫌う方もいらっしゃいましたし、夜 10 時消灯が苦痛だという方もいたっ  
しゃいました。仕事から帰り、夜の 10 時からスポーツ番組やニュースを見て、ビールを飲  
みたいという方にとっては、車の中で、自分の好きな時間にお酒を飲みながらテレビを視  
聴し、音楽を聴ける自由な生活は魅力です。

車中泊のメリットは他にもあります。まず、施錠できることです。避難所では、家から  
持ってきた貴重品がいつ盗まれるかわからないと、おちおち寝てもいられません。車なら  
施錠ができ、そこで寝泊まりすることで車上狙いからも守ることができます。他にも、  
空調管理もできることや、他人の眼を気にすることなく、車内で好きな時間に好きなこと  
ができます。携帯電話も他人に気兼ねせず話せますし、着替える際の他人の視線の煩わし  
さもありません。そのような理由から、車中泊を選ぶ方が多くいらっしゃいました。

メディアなどでは盛んに、エコノミークラス症候群など健康上の懸念から、いち早く車  
中泊を解消するようと言われていましたが、その車中泊解消に取り組んでいた行政の職  
員自身が車中泊だったこともありました。というのも職員の方々は、避難所にいると気が  
休まることのないのです。「あの件はどうなった?」「この情報はどういうことだ?」「昨日  
お願いした件はどうなっている?」といった具合に、住民の方から言われ続けるので、避  
難所にいたいと思わないのです。被災した家に戻れない職員の方々に車中泊が多いとい  
う点も、大きな問題だったと思います。



このような様々な理由から、私は、今後も大規模災害が起きた時には、車中泊は減らな  
いだろうと考えています。そうであるならば、各自治体で、車中泊に対する対策を予め考  
えておく必要があると思います。ちなみに私は、これまでに全国の様々な自治体から、車  
中泊についてのヒアリングを受けました。そのなかでは神奈川県横浜市が、いち早く車中  
泊への対策を取りまとめました。関心のある方は、ぜひ横浜市がとりまとめた対策を参考  
にされてはいかがでしょうか。

熊本地震の災害対応の課題としては、地震災害のような長期間にわたる避難所運営の事前対策が十分でなかったように思います。風水害に対する対応は、これまでも対応されていましたが、それらはいずれも、数日で避難所を閉所できるような経験でした。今回の地震で、益城町では、最後の避難所を閉じるまでに地震発生から半年を要しました。そのような長期にわたる対応マニュアルも確立されていなければ、そもそもそのような前提に立った避難所運営の訓練もなされていませんでした。そのため、避難所に派遣された職員の負担は非常に大きかったと言えます。

訓練されていなかったがためのトラブルの例を紹介しますと、避難所に集まった人の情報を集約するための避難所名簿が準備されていませんでした。そこで、統一した避難所名簿のテンプレートを作成し各避難所に名簿の作成を提案しました。しかし、既に意識の高い避難所担当者は自分たちの手で避難所にいる住民の方々の名簿を作成していました。一通りの情報収集が終わった後に、町から「この避難者名簿に避難者の情報を書き込んでください」という通達があったのです。その避難所ではわざわざ書き写しをしたために、二度手間が発生し、現場の方々のさらなる負担になってしまったこともありました。このように人に対する問題が山積するなかで、とてもペットにまで手が回らないという状況にありました。

避難所の過密状況に対して、益城町は、近隣の温泉地などに一時宿泊するリフレッシュ避難制度や避難所の新設のほか、環境改善として感染症対策や、仮設風呂や洗濯機、乾燥機の設置などによる衛生面の向上など、様々な対策に取り組みました。残念なことに、結果的には、地震による死者よりも関連死のほうが多くなってしまったのですが、関連死を出さないために一生懸命、対策を施したのです。同時に仮設住宅の用地検討や建設準備、介護士が不足していた福祉避難所へ、全国から介護士を集める手続き、民間施設と福祉施設との間の調整、住宅被害の認定と罹災証明の発行、物資の受け入れと仕分け・搬送、保育園と学校の再開、子どもたちの給食手配、避難所と学校のためのシャトルバス運行に向けた交通機関との協議やバス停設置など、やるべきことがあまりにたくさんありました。県外の行政の職員の方にも応援に来てもらいましたが、職員の方々は不眠不休で、食事もままならないような状況で頑張っていました。

そのような状況でペット対策に有効な手立てが立てずにいたのですが、その状況を見かねた NGO や NPO など任意団体の方々が、ペットの支援に乗り出しました。例えば総合体育館では、ある団体の方々が、敷地内にペットと同居できるテントを設置しました。飼い主とペットの双方にとって同居することが大事だという強い理念からです。

ただし、私は今でも、このテントが良かったのか、悪かったのか判断できません。飼い主の方に聞くと、「ありがたかった」という声が本当に多く、その一面では良かったのでしょう。一方で行政の立場では、設置を認めると行政の責任になり、テントで何かトラブルが発生した場合、責任を取りきれないという不安がありました。相手がどのように運営するのか全面的な信頼を寄せていいものかという点も判断に時間を要しました。支援してくれる NGO、NPO がどのような組織で、普段はどのような活動をしていて、災害時にはどのような支援をしてくれるのかが予めわかっている、災害前から信頼関係を築けていない限り、災害時に「はい、お願いします」とは言いづらい状況にあります。

支援を受け入れた後も、次々と不安は沸き起こりました。まず当初は、支援していただ

いた方には不快な言葉だと思いますが、獣臭がきつかったのです。近くに遊具があり、子どもたちが遊んでいるのですが、臭いがきつくて、遊ぶのをやめてしまうほどでした。その後、テントを設置した NGO の方々が臭い対策として、シャンプーをされていました。人間の仮設風呂はあるけども、ペットのシャンプーはどうするのか。ペットの排せつの処理はどうするのかなど、このような問題は今後も課題となって出てくるのではと思います。ペットの衛生面の問題をどうクリアするかは、非常に重要です。

また、別の団体が、やはり総合体育館の競技場にテントを設置されました。私は、益城町と総合体育館の指定管理者である YMCA さんと共に、この団体の方と、テントを張ることに対して色々と打ち合わせをしました。このテントを選ぶペットの世帯の方も多くいましたが、これも良かったのか悪かったのか、私にはわかりません。いずれの団体も、一刻の猶予もないと迫ってきます。それは理解できますが、一方でそこは調整池であり、すぐ近くに川があります。もし川が氾濫すれば水浸しになる場所です。そこにテントを設置したことで、逃げ遅れや二次災害が発生しないかと懸念する行政の立場もあるのです。

ほかにも、テントの中に押し入られたり、性犯罪があったりした場合はどうすればいいのかという問題もあり、設置に対して、行政は慎重にならざるを得ませんでした。団体の皆さんの熱い思いと、「これが正しい」と信じていらっしゃることは十分に理解しているのですが、二次災害を防止するという観点では、行政は「はい、わかりました」と、初めて接する団体に対して、すべてを任せることは難しいという現状がありました。

避難所運営は、やはり災害が起きてしまってから様々な問題が出てくるので、その一つとしてペットに重点を当てて対処することは困難です。また、実際に問題が起きた時に、何が正しいのかという判断を下すことも、非常に苦しさを伴います。そう考えると、やはり事前に対処を考えておくべきなのでしょう。既に私たちは、今までの被災地の経験から、ペットにまつわる様々な課題があることがわかっています。そろそろ、そのような課題を踏まえて、我が自治体ではどのような対処をすべきか、どのような団体と連携を取っておくべきなのかを、検討すべき時期に来ているのではないかと思います。

人間への対策もままならないなかで、ペットも含めた避難所運営をどうするか。その一つの解決策として、長野県飯田市と私とで開発したのが、ファーストミッションボックスです。簡単に概要を説明しますと、これは誰であろうとそこにいる人を戦力として取り込み、発生直後から迅速に対応することを可能にするシステムなのです。

通常、防災訓練にも出たことがなく、防災マニュアルを一度も読んだこともないような住民が次々と集まってきたところで、「行政の職員は、まだ来ないのか」、「自治会長はどこだ」といった具合で、何も前に進みません。そこで、全住民に、「災害が起きたら、あの体育館の横にあるオレンジの箱を開けてください」とだけ言っておきます。防災の知識はなくても、とりあえず前々から言われている通りにオレンジの箱を開けると、そこに指示書が入っています。

開いた方は、応急的な避難所運営のリーダーになりました。でも、気負わなくて大丈夫です。指示書の通りに動けばいいのです。一つの指示書には一つの項目が書いてあります。

ミッション 1 は、5 人の人を集めること。近くにいる人に声をかけ、5 人集めます。

ミッション 2 は、5 人それぞれに、箱の中にある 5 色のファイルを渡すこと。

ミッション 3 は、5 人に、それぞれのファイルにある指示書の通りに動くように言うこ

と。

ミッション4は、5人に指示を出した1時間後に、「報告に来てください」と言うこと。作業の途中でも一度、来てもらいます。

以上、これだけです。

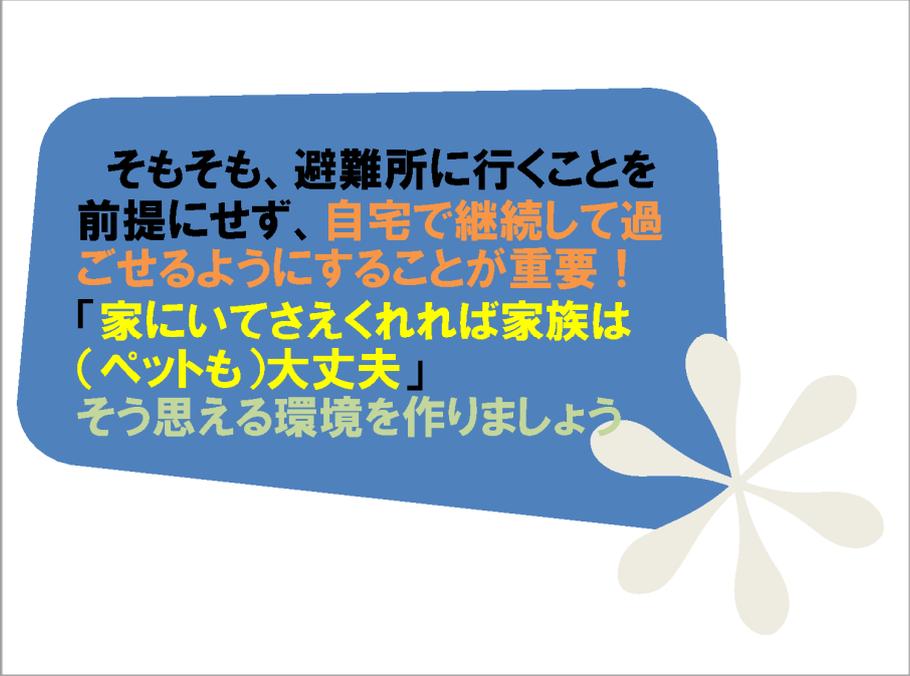
5色のファイルにも、それぞれのミッションが書かれています。例えば赤いファイルは、ミッション1として「5人集めてください」と、書いてあります。赤いファイルを受け取った人は、避難所のレイアウト班のリーダーとなったのです。5人を集めたら、次のミッションとして、体育館の舞台の下にあるパイプ椅子、防災倉庫にある長椅子などを指示通りの数だけ集め、受付を作ります。受付の作り方も、詳細にレイアウトが書いてあり、その通りに並べるだけです。どれも誰でもできることが書いてあります。

災害発生からの1時間なり3時間なりを、誰が担っても機能的に動かすシステムが、このファーストミッションボックスなのです。長野県飯田市は、これを危機管理対策室に置いています。全職員が課を超えて、立場を超えて、生きていて動ける人が、まず災害対策本部を立ち上げるということで、普段から全職員を対象に、抜き打ちでファーストミッションボックスを使った訓練も行っています。避難所運営だけでなく、企業でも、このようなファーストミッションボックスのシステムを導入する組織が、全国でも増えてきています。この指示書の中に一枚、例えば6色目のファイルを作り、そこにペットに対する応急的な対応のリーダーという役割を設けて、指示書の通りに粛々とペットに対する対応ができるようにしておけば、ペットにまつわるトラブルも軽減できるのではないかと思います。なお、災害対応する際に必要なもの（文具、ビブス、名簿などの書類等）を一緒にファーストミッションボックスに入れておけば、さらに機能性が増します。



もう一つの視点としては、避難所に行くことを前提とせず、自宅で継続して過ごせるようにしておけば、ペット問題も軽減できるのではないのでしょうか。益城町では、地盤が弱いために、比較的新しい家でも全壊した例がありました。地盤、建物の強さも含めて、継続して自宅に住める環境を築いておくことも重要ですし、さらに室内でペットが怪我をし

ないようにする対策も必要です。大きな家具だけを固定するのでは不十分です。家具は高かろうが低かろうが、重かろうが軽かろうが、固定されていなければすべて動き、人やペットを襲う凶器となることを知ってください。また、固定すれば大丈夫なわけではなく、固定すればするほど中身が飛び出しやすくなります。中身の飛び出し防止対策までして、初めて安全な家具になると知って、改めて家全体の安全対策を考えてほしいと思います。



**そもそも、避難所に行くことを  
前提にせず、自宅で継続して過  
ごせるようにすることが重要！**  
**「家にいてさえくれれば家族は  
(ペットも)大丈夫」**  
そう思える環境を作りましょう

また、居住形態には一戸建てとマンションがあり、それぞれ防災対策が異なります。一般的な耐震構造のマンションの場合、階によって被害の様相が異なり、階が上がれば上がるほど室内の被害が大きくなる傾向にあります。従って1階に住んでいる方と、10階に住んでいる方では、防災対策も同じではないことがわかります。マンションにお住まいの場合は、何階で暮らしているのか、何階でペットを飼っているのかも踏まえて、上階ほどしっかりとした防災対策が必要です。首都直下地震、南海トラフを考えれば、地震は必ず来るのですから、そろそろ凶器となる家具をできるだけ減らしていくという対策も必要となってくるでしょう。

地震が来たら、ペットを抱いてテーブルの下に潜ればいいと思っている方もいるでしょう。そこが必ずしも安全とは限らないということも、知ってほしいと思います。家具が凶器になり得るという点では、テーブルや机も同じです。もしかしたら、簡単に倒れて人やペットを襲う凶器になるかもしれません。四本の脚を固定していないのに安全だと思い込んでいる認識も改め、室内の安全対策をしっかりと講じてほしいと思います。

人間の足も、ペットの肉球も保護するという点で、お勧めしたいのは、なかなか固定しきれない生活雑貨類に、できるだけ柔らかい素材のものを選ぶことです。我が家では20年かけて、家の中にある生活雑貨類を柔らかい素材に変えてきました。掛け時計一つをとっても、ガラス片が出るので、この時計が壊れたタイミングで、数字と針を直接壁にはるタイプの時計に変えました。子供が使う目覚まし時計はシリコン製です。傘立てや写真立て、ごみ箱などのすべての生活雑貨類を紙、皮、布、ゴム、シリコンなどの柔らかい素材に変えたのです。このようにインテリアや室内を飾る楽しみと安全を両立する方法もあるので、

知っておいてほしいと思います。

また、ペットも人間も、そもそも食べ物を備蓄しておくことが大事です。我が家は一カ月分を用意しておりますが、少なくとも 10 日分程度は用意しておくといいいでしょう。我が家は「災害時の非常食」という概念ではなく、普段食べている食材を、少し多めにストックしておき、食べたらず補充する形の「家庭内流通備蓄」を提唱し実行してきました。実はこれは、私が 20 年前から提唱している方式です。東京都でも、私の考えを取り入れた「日常備蓄プロジェクト」を推奨しています。日頃から自宅で利用しているものを、少し多めに備えておけば災害時にも対応できるということで、11 月 19 日を「いい備蓄の日」に制定しています。ペット用品も、普段から少しずつ多めに備えておくことで、対処できるのではないかと思います。

### 東京都の取り組みにも普及「都民の備蓄推進プロジェクト」

**自然災害に対して各家庭における食料品や生活必需品の備えの重要性を知り具体的な備えにつなげていく日常備蓄プロジェクト**

**「自宅で生活する場合に備えた備蓄は、特別な準備を必要とするものではありません。日頃から自宅で利用、活用しているものを少し多めに備えることで、災害時にも活用することができます。」(ペット用品も多めに用意しましょう)**



**「備蓄の日」11月19日を設定**

危機管理教育研究所 代表 国崎 信江 <http://www.kunizaknobue.com/>

13

首都圏の方は特に食材の備蓄は重要です。東京には毎日、全国から新鮮な魚や肉、鶏卵、野菜、果物がおよそ 250 万トン入ってきます。その恩恵を日常的に享受しているために、意識していないかもしれませんが、23 区内には生産者がほとんどいないのです。もし、その流通が止まったら、東京から食べ物が一斉になくなるかもしれないという、本当に恐ろしいことに、多くの人は気づいていません。新潟・中越でも、熊本でも、農家の方が多く、裏の畑から野菜を引っこ抜いて食べたという話をよく聞きます。東日本大震災では、やっと県外からの支援が来たのは 10 日目以降だったという地域においても、それまでを地域の農家の方々が助けてくれました。東日本大震災を思い出せば、震源地でもない首都圏でスーパーやコンビニからあつという間に食料が売り切れ、なかなか入荷しませんでした。首都直下地震が発生し、店舗や倉庫からも食べ物が底をついたら、そして被災人口分の食料を被災地圏外から配送してもとても足りない、次にいつ来るのかわからないとなったら、人々はいったいどうなるのでしょうか。

犯罪面を含めて、とても恐ろしいことになるのではないかとというイメージが私にはあり

ます。首都直下地震が起きた時には、人でさえも極限の状況になるので、そのなかでペットに対してどれほどの対応ができるのかを考えますと、やはりペットを家族と思うのであれば、その大事な家族が苦しい思いをすることのないように、自助でしっかりとペットを守る対策もしてほしいと思います。

本日はご聴講いただきまして、ありがとうございました。